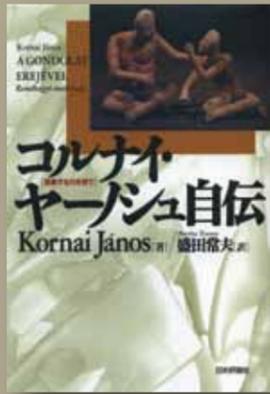


ドナウの四季

2010年・秋季号・No.8

ハンガリーを駆け抜けて	江渕 泰久	1
ハンガリーでの物づくり	高根 友光	2
役人主権、いまだ健在なり	盛田 常夫	4
大空への挑戦	加藤 詩乃	6
パットの名手はパターを変えない	柿崎 広好	8
バドミントンの記憶と出会い	植條 公士	9
スポーツ行事・運動サークル情報		10
緑の丘日本語補習学校	森 よしみ・トンポシュ 典子	11
留学生自己紹介		12
三浦 志乃・俣野 貴慶・清松 優記子・山田 翔・坂本 たけし		
「ドナウの四季」ホームコンサート		15
桑名 一恵・町田 百合絵・岩瀬 桐子・松永 みなみ		
珠玖 加奈子・香川 真澄・坂井 圭子		



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

1928 年に生まれたハンガリーの経済学者コルナイの自伝。
第二次大戦後の社会主義計画経済から現在までのライフヒストリー。

「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】
◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 ◆日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判
■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

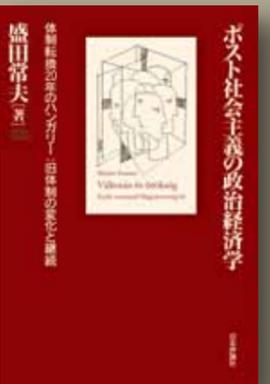
ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

盛田 常夫著

■ 2010年1月中旬発売 日本評論社 定価3800円

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。体制転換の社会哲学から経済システム、政治体制、社会動向、イデオロギーにいたるまで、社会経済の全般を捉える。



ハンガリーを駆け抜けて

江淵 泰久

「あなたに少しマジメな相談があるの」
晩酌中の至福のひとつのこと。突然姿勢を正して切り出す妻の真剣な表情にただならぬものを感じた私は、手にしたドレーヘルを落としそうになった。

「ジョギングを始めようと思うのだけど、どうかしら？」

かなりの拍子抜けをくらった私を尻目に妻は続けた。

「占いによると、私走った方がいいらしいのよ」

最近運気が落ち何かとノレない妻は、少しずつ生活にイライラを感じ始めていた。日本へ一時帰国した際、本屋で立ち読みした雑誌の古いコーナーにはこんなことが書いてあったらしい。

「あなたは何事もうまくいかず、ストレスをためています。それを打開する為には自分の趣味に力を入れて下さい。新しいものでなくこれまでにやったことがあり、かつあまり力を入れなかったもの方がいいでしょう。」

走ったり泳いだりすることが好きな私としては、妻のライン参加は大歓迎である。運動不足の妻には何かしら体を動かして欲しかったし、これまで週末に家族を置いて一人で走り行っていた私への批判も軽くなる。願ってもない申し出に二つ返事で応えた。

それ以来「走る」が何かと妻の話題に上るようになった。「市場で美味しそうなお肉を見つけた」とか「グヤーシュは〇〇のレストランが一番」などの食べることの話が大半を占めていた妻から、「61番トラム終点近くの坂って案外急なのねえ」とか、「ヴァロシュマイヨールまで走ったら、〇〇さんに見られて恥ずかしかった」という話題が増えた。「家族で走る？」と、ほとんど拒否する選択肢がないオファーを受けた2人の子供も合流した。マルギット島を周回するジョギングは立派な家族イベントとなり、ウィーンやバラトンへ遊びに行く際も、プラッター通りや湖岸をジョギングするのが恒例プログラムになった。

赴任の暮らしぶりが変わったのがこの頃から。家族が寛容になり「水を得た魚」となった私自身この趣味に拍車がかかった。これまで見えなかったハンガリーを感じるよ

うになった。郊外の町では大抵、車の往来が少なくてもったいない位のきれいな道が広がっていること。すれ違うランナーに会釈をすると、ヨーロッパのどの国よりも高い確率で挨拶が返ってくること。

トレーニングでしばらく並走させてもらったランナーに「ありがとう」と別れ際に声をかけると、向こうは立ち止まって「おたがいよい走りを！」とわざわざ握手を求めてきた。国外の街をあちこちジョギングしてまわったが、こんなにフレンドリーなランナーはハンガリー以外にはいない。とにかく話好き。アジア人が珍しいのか、走っているとランナーが寄ってきては、「どこから来たのか」、「東京はどんなところか」などと質問を浴びせる。マルギット島では同じルートを回る為、ゆっくり歩いている人を何度も追い越す。ウォーキングをする熟年のご婦人2人、私が3~4回追い越しても、わき目も振らずに話に熱中している。歩くより、話すことが目的なのか、と可笑しくなる。

転機となった2008年秋以降、いろいろな大会に出た。日本で始めていたトライアスロンレースに出た際、私のハンガリーでの相対順位は日本の時よりはるかに下だった。持久走で「タイムと体重は反比例する」という定説を覆したのもハンガリー人たち。体重を絞って臨んだある大会で、私の周りには、ラードたっぷりの煮込料理を毎日食べているであろうと思われる体格の人がウジャウジャ。トレーニングはしているのだろうが、あの大きな体をあのペースで動かす続ける心臓エンジンのパワーは凄い。すぐに病欠で会社を休むハンガリー人のことを「軟弱な」と思っていた。でも本当は違う。実は体は強いのだ。「やっぱり会社を休みたいだけじゃない」と言いたくなる。オルフという小さい町で行われたレースではWE B ページに珍しく英語で大会概要が書かれていた。前泊のホテルを取り、準備万端整えていたが、何となくスケジュールの辻褄が合わない。開催直前になり確認すると、英語とハンガリー語のページで開催日が違うのだ。「一番大切な情報だろう」と抗議しても、「ああ、それ間違い」と悪びれる風でもない。日本だと大騒ぎになる

話だ。よく言えばのどか。小さいことに目くじらをたてず「しゃあないか」と寛大な心を持てる様になったのも、間違いなくハンガリー生活のお陰(?)だ。

今年5月のドナウ河畔レースでは、「家族全員が同じ大会の同じレースに出る」という夢を実現できた。4人がそれぞれの真剣モードで5kmを走った。7歳の次男も併走なしで完走。ゴールに駆け寄ると、次男と同走したおじさんおばさんがやさしい目をして口々に「スーパー！スーパー！」と小さな次男を褒め称えてくれた。子供を見るとトロけそうな目で心から「かわいい」という表情をする。これもハンガリー人の特徴だ。「子供を愛する」気持ちは世界一じゃないか、と思う。このドナウ河畔レースが最後の大会になった。日本への帰任が決まったからだ。製造業に勤める私は2006年から4年、新工場立ち上げという使命を終え、9月に日本に戻った。

駐在開始当初は分からないことだらけだった。ひとりで仮事務所や椅子・机を探るところから始まった。会社の至るところで立ち食いするハンガリー人。時間に遅れても「それが何か問題？」という人たちとうまくやっていく自信はなかった。だが、日本人とハンガリー人の距離を縮めるところから始まったミッションも、生産が始まるころには峠を過ぎた気分だった。生活空間が広がってきたのもこの頃から。リーマンショックを潜り抜け、ここに来てようやく予定のフル生産が見えてきた。ハンガリー人は良くも悪くも人間っぽいと思う。この国とここに住む人たちをいろんな角度からたっぷり眺めることができた。

「古い」のことはあの時以来話題にすら上がらない。妻もすっかり忘れていた。でもあのきっかけは大きかった。帰任を前にした妻は「もっとあちこち走りたかった、あの大会にももう1回でたかった」と叶わぬ夢を毎日口にしている。最初の海外赴任地は思い入れが深くなるそう。わが家族を支えてくれたハンガリー人とここに住む日本人の方々に感謝の気持ちを抱きつつ、駐在を終えた。

(えぶち・やすひさ プリヂストン)

ハンガリーでの物作り

ハンガリーで働き始めてもう10年が過ぎました。もっと経験豊富な諸先輩をたくさん知っておりますが、2000年前後にハンガリー各地で工場を立ち上げた仲間達はみんな日本に帰り、残っているのは私だけかと思います。

地方都市での生活

私の勤務する会社はBudapestから南に65kmのドゥナウーイヴァーロシュ(Dunaújváros)にあり、私はそこで精密プレス板金加工工場を経営し、ハンガリー以外にもEU各地のセットメーカーにプレス部品を納入しています。

この10余年、私はこの地方都市で生活してきました。正確には、町に隣接するラツァールマーシュ(Racálmas)という村です。家の片隅に「鶏小屋」や「豚小屋」の跡がある大きな農家を借りています。10年前は地方に住む日本人はまだ少なく珍しがられたものです。工場に近く、都会の騒音とは無縁の生活を堪能していますが、地方都市に住む短所は文化・芸術から縁遠くなるということでしょうか。最近になって、このことを痛感しています。一方、生活面では最近大型のスーパーが来店してきたので、もう田舎の品不足に悩まされることもなく、週末にBudapestに買出しに行く必要もなくなりました。これは本当に大きな変化です。

私はハンガリーと触れ合うには地方都市・田舎は最高と思っています。ハンガリーの家庭を身近で見ていると、ハンガリー人が良く働くのにびっくりします(規律が要求される工場の働き方とは違って)。庭なんて自分で作るのは常識ですし、家まで作ってしまいます。家庭菜園も一流です。日本の兼業農家レベルに近いのではないかと思います。店の品揃えは、日本より上だと思います。店では夫婦が、家族がメモを見ながら買い物しております(楽しみながらというより、真剣に)。こういう光景を見るたびに、自分で出来ることをお金の力で他人(職人)に依頼してしまう文化になった今の日本を考えると、私達は幸運な人だと思えます。

日本人が何時しか忘れてしまった「近所付き合い」も残っています。田舎ではそれが

毎日の生活そのもので、優しさをベースにした人情にも囲まれて生活しています。今朝も、「チョコロム!」と、子供達が声をかけてくれました。もちろん、この平穏で変化のない単調さに飽きる事もしばしばありますが。

日常生活で付き合うこんなハンガリーの人々が会社に入り組織化されると、大きく変わることにびっくりします。家庭であれだけ勤勉に働いていた人が組織化されると、まるで融通の利かないロボットようになってしまうのです。「働くこと」よりも「働かないこと」の方が偉いかのような雰囲気を作り出されます。家庭菜園や庭の手入れを生き生きとやっていたあの自主性はまったく発揮されません。地方都市や村の多くの人々は大きな工場で働いた経験がないのでしょう。そのような経験があったとしても、旧体制時代の労働規律や経営の弛緩が人々を鍛えて来なかったのだと思います。日本式というより、大きな工場をきちんと動かすことのたいへんさや大切さを教えることから始めなければなりませんでした。会社はお金を稼ぎ、私達の生活を守り将来を保障する大切な手段であることを訴えつつ、工場建設や仕事の改革に全力をあげました。

工場の立ち上げ

創業当初、募集した500名の社員は確保したものの、ほとんど全員が工場労働未経験の新社員です。働く意欲など微塵も感じられず、会社を社交場と思いつこんでいる節がありました。旧体制時代の工場では、仕事中の飲食、喫煙、お喋りが普通だったようですから、近代的な工場で働くやり方を学んで来なかったのでしょう。

休み時間に恋人同士が抱き合っているのを見た時には、「すごい所に来てしまった」と声も出ず、ため息をつくばかりでした。拘束時間が終わるとルンルン気分です。日本からの赴任者10名にフィリピン工場のお母さんは人員整理対象にはなりません)。頭の痛いのは現職復帰と現行賃金の保証が法律で定められている事です。日進月歩の技術革新で激しい企業間競争のこの時代、「3年ぶりです」、「6年ぶりです」、「子供が出来たので3年休みます」。これにはチョット参っております。出産休暇以外の短期・長期の病欠も8%になるのですから、会社の労働管理はたいへんです。

今、社内は子供が大きくなったおぼちゃん

が主体です。私には、ハンガリーの貴重な労働力が放置されているとしか思われな

ない事態が進行しておりました。10年経った今でもこの事に苦しめられております。出産・育児のおめでたい話なのですが。

出産・育児の為に入社?

現在40名ほどの産休育児休暇の社員がおります。その80パーセントがこの操業初期の2~3年に入社した社員です。彼女達から聞いた事があります。「将来子供がほしいから、しっかりした安心できる会社に入っておきたい」。エエ……。気がついた時は社内にお母さん予備軍がいっぱい。お母さん予備軍は計画通りに1人目、2人目、人によっては3人目と産休・育児休暇を使っていきます。

第一子の出産で3年以内に出社は納得します。二子を出産し6年間出社なしではもう社員かどうか判りません。続けて3子だと、9年間も顔を見ませんから、社員だと知っている人はわずかです。出産以外に、いろいろな理由をつけて休んでいる社員も結構います。

日本では出産祝い金などがあり、みんなで「おめでとう」なんて言うのですが、こういう状況ではそんな気にはなれません。出産は人類にとって生き残りをかけた大切な事。これを大切にすることは当たり前と思っています。この世界不況で人員整理をしたとは言え、社員の10パーセントが産休・育児休暇では素直になれません(休暇中のお母さんは人員整理対象にはなりません)。頭の痛いのは現職復帰と現行賃金の保証が法律で定められている事です。日進月歩の技術革新で激しい企業間競争のこの時代、「3年ぶりです」、「6年ぶりです」、「子供が出来たので3年休みます」。これにはチョット参っております。出産休暇以外の短期・長期の病欠も8%になるのですから、会社の労働管理はたいへんです。

今、社内は子供が大きくなったおぼちゃん

悪しき慣習との戦い

操業当初、私共15名ほどで工場が回る

はずがなく、数百名の善良なハンガリー社員が私達を支えてくれました。この間、私達は愚痴だけではなく、しっかり「学習」もしました。善良でない社員が「寄生することを良とし、それを自慢する性癖」がある事に注目しました。国家の福祉厚生制度に寄生しずる休みを常習とする者、会社の組織に寄生し仕事をさぼり賃金を受け取る者。これらの「寄生する性根」に法廷闘争を含む覚悟で戦いを挑みました。「不当労働行為」、「不当処分」、「不当解雇」、「労働法違反」などいろいろ言われました。不当には正当、違反には遵守で対峙し、法廷では勝ったり、負けたりしましたが、「寄生する性根」への妥協は一切ありませんでした。

毅然たる闘いに温かい応援者が現れました。多くの善良な社員達です。善良でない社員に注意・処分を課すと善良な社員は笑顔で返してくれます。この日本人の対応は善良な社員にとって非常に新鮮であり、映り、驚きさえもたらしたようです。長い間、従順あること、我慢すること、泣き寝入りして自己表現が押さえつけられていたこの国では、私達の行動が新鮮に映ったのかもしれない。

ここから多くのことを学ぶことができました。寄生だけして向上心のない社員と、良心的な社員とを区別することの大切さ、そして良心的な社員と協力して会社を支えていくことの大切さを身にしみて感じてきました。

一方、生産活動では現場重視、技術重視、実力主義を徹底しました。現在、当社の管理者は大半が現場からのたたき上げです。不足している所は勉強・教育しました。営業担当者は3年かけて主要な職種を経験させました。品質管理者は金型・プレスを必修科目として研修させました。日本式の社員教育を基礎しております。これに反発したのは大卒のエリート達でした。やがて、彼らの8割は退職して行く事になりました。旧体制で育ったハンガリーのエリートたちは、工場労働者とは異なる仕方、甘やかされていたのだと思います。

世界的な経済不況で当社も人員整理を含むリストラを計画せざるを得ませんでした。当然「寄生する性根」の強い社員をリストアップする頃には会社全体の雰囲気が変わり始め、ずる休みや仕事のサボりの程度は、私が許容する範囲内に入ってきました。10年の闘いの成果だと思っています。

民族の垣根を越える

この世界的な不況の中、会社組織は私を含め日本人スタッフを3名に減じ、他は日本へ全員帰任とし、会社・工場の運営主体はハンガリー社員である事を明確にしました。会社が生き延びていくためには、可能な限りの現地化が不可欠だと判断しました。ハンガリー人従業員には、「ここはハンガリーの国だ。工場の主体はハンガリー人であるべきだ」と粘り強く訴え続けました。その思いが伝わったのでしょうか、何時しかハンガリー人社員には私の想定以上の技術的能力と管理能力が備わり、コミュニケーション・意思統一の面は強化され、現在は多数の日本人スタッフが在籍していた時以上のレベルになっています。もともと能力のある国民ですから、きちんと教えればそれを自分の物にする力をもっているのです。

私の隣で仕事をしているレーカさん、工場管理をしているガボさん、技術のドディさんを、ここ3年ほど彼らをハンガリー人と意識して仕事した事ありません。そういう名前が付いている人間と一緒に働いているだけです。もう民族の垣根はありません。彼達も私を日本人としてみていないようです(私のことを「オオカミ」とか言っているようですが)。

大きなポイントとなる在任期間

私にとって、10年にわたるハンガリー滞在が大きな力となっています。短期の駐在ではハンガリー人の性癖や労働の仕方を理解し、それを改めるように一貫して指導して、従業員との信頼関係を確立することは不可能です。2~3年の駐在で日本に帰るケースを多く見聞しますが、私のような無能な人間にも、10年という期間が与えられ、工場に隣接する村でハンガリー人とともに生活すれば、何とか少しずつ成果を生み出すことができます。

ハンガリーという異国の地で納得できる仕事をやり遂げるには、「短期の腰かけではなく、どっしり腰を据えて取り組む」ことが大切などとしみじみ感じているところです。ハンガリーを知り、ハンガリー人との信頼関係を作り上げる為には、最低でも5年や10年の時間が必要だったと思っています。

物を作る前に人を作る

「EUでトップレベルのプレス加工メーカーに」。現在、これが当社の目標です。「身の程知らず」、「井の中の蛙」かもしれませんが、二つの民族が協働し、それなりの成果を上げるために、共通の目標を持って自主性・自律性・実行力・結果への責任感を生み出すことが一番重要だと考えます。結局のところ、それが労働の質的レベル向上に不可欠の要素だと思います。この共通の目標へチャレンジを続ける企業であることが、従業員の力を結集させる会社の力の源泉だと考えます。

これこそがハンガリーにとって、非常に大切な課題ではないかと思えます。単純な低賃金労働ではなく、産業界にとって魅力的な労働力を有するハンガリーになることが、双方の民族の利益になるはずです。考える事が人間の特権なら、私たちは今行っている一つ一つの労働を考えながら再チェックする。これが労働の質的向上のスタートと思っています。

私たちは気づかないうちに物を作ることに基準となって、この基準を満たさないことは悪いという判断をし、個人や集団いわゆる人間を批判するに事に傾きがちです。確かに一面では正しいのですが、これだけに終始してしまうと目的すら達成できなくなってしまう危険があります。

私は日本人の物作りの根底に流れる「人が物を作る」と言う考え方をもう一度実践して見たいと思っています。私達日本人は武道や芸道など人間を中心にすえた文化を持っています。「物を作る前に人を作る」。もう一度この言葉を噛み締めてみたいと思います。民族的資質の特徴に違いもありますが、私の10年の経験からは環境条件、条件、指導内容によってはハンガリーでこれを実現する可能性は十分あると思っています。

地方都市、田舎暮らしの中で、まじめで勤勉な多くのハンガリーの人達を知りました。工場や職場で「働くこと」が新たな価値を生み出し、それが生活を守り、将来を保障する。そして、「労働のレベルアップ」がマジャール人の国を豊かにすることを社員に話しかけながら、ハンガリー社員と共に新しい10年に進もうと考えています。

(たかね・ともみつ 相川ハンガリー)

役人主権、いまだ健在なり

盛田 常夫

地方自治体の中でも、建築課は特別な存在だ。許認可にかかわる部署だから一種の独立権力になっている。ここが許可しない限り、地下鉄工事も止まってしまう。工事が始まってからどうしてそのようなことが起きるのか理解不能だが、とにかく自治体の建築課は絶対的な権限をもっている。

2009年に照明デザイナーの石井幹子さんが設計したエリザベート橋のライトアッププランも、ブダペスト市建築局からの修正要求が度重なって、当初のデザインと似ても似つかないものになった。確かに橋は明るくはなったが、橋桁のラインが浮き彫りになる照明が当初のデザインだった。しかし、修正に修正を重ねた現在の照明には石井さんの構想がほとんど活かされていない。

それほどにハンガリーでは建築局(課)が絶対的な権限をもっているから、建設・建築許可申請は頭が痛い。権限と腐敗は表裏一体。自治体の建築局(課)は腐敗の巣窟になる。

特殊な規制

ハンガリーには日本では考えられないような規則や規制が存在する。自宅敷地内の樹木の伐採にも許可が必要だ。自宅に庇(ひさし)を取り付ける場合、1.5mの幅を超えるものには許可が要る。自治体によって規制の仕方には違いがあるようで、15平方メートルまでの庇なら許可がいらなところもあるが、対称型の家屋(いわゆる双子型家屋)の場合、その一方の形状を変える改築はほとんど許可されない。

許可が必要とは言っても、隣近所の人が役所に通報(密告)しなければ問題ない。だから、多く人は許可なしで実行する。しかし、通報されると面倒で、取り壊しや罰金命令がでる。しかし、いったん許可申請をすると、簡単に許可が下りないだけでなく、却下されることも多いから、業者ですら申請案件に積極的に関わることを避ける。

やっかいなのは隣家との関係が良くない場合。隣家の異議申立てがあると、改築は簡単に済まない。まず居住区の役所に

改築申請するが、建築課で即座に判断できない案件は専門家(都市計画)委員会の審議事項になる。このレベルで却下されたら、ブダペスト市の地方委員会へ再審査を要求できる。ここでも却下されると、民事訴訟しか道は残されていない。反対に、再審査で申請者の主張が認められると、再び居住区の建築課へ審査が差し戻しとなる。

知人・友人に聞いてみると、改築をめぐる隣家との争いはかなり多い。小さな案件ですら、役所の審査が終わるまで1年近くかかる。民事訴訟で何年も裁判で争っているという事例をたくさん聞かされた。

建築申請

居住空間を広げ、かつ冬の寒さを和らげるために、15平方メートルのベランダに屋根を付け、透明ガラスの雨戸を設置しようと思った。北欧諸国で流行している「ガラスのテラス(üvegterasz)」である。こうすれば、夏はすべてを開放し、冬は閉め切ることができる。

建築士を紹介してもらい、2区の建築課と予備交渉を行った。私の家は双子型なので、即座に却下される可能性もあったからである。隣家と一緒に申請すれば許可取得は難しくないが、隣は門の扉を赤色の鉄製に替えたばかりだし、外壁を白色からピンクに近いカラーに変えてしまい、我が家の白壁とはアンバランスになっている。隣のベランダとは3mほどの垣根で遮られているから、隣の趣向は気にならないが、一緒に何かをできるような隣人ではない。それに隣人は何でもすぐに役所に通報する性癖があるから、やはり許可なしの改築はリスクが大きい。

双子型とはいえ、我が家は角地で敷地の形状も庭を囲む塀の材質も色も隣家とは異なる。10mほどの樫の木4本が家屋を覆っているし、前庭にも木々が生い茂っているから、双子型の形状を確認することは難しい。だから、テラスをガラスで囲う程度のこととは許可されると考えた。事実、予備交渉を行った建築士が7~8割方許可される感触を得たというので、20頁ほどの図面書類をま

とめて、建築許可申請を行うことになった。

コネを探せ

アメリカで活躍するハンガリー人物理学者バラバシの『新ネットワーク思考』(NHK出版、2002年)に「六次元の法則」が解説されている。「6人の人を介せば、地球上の15億人のほとんどの人とつながることができる」。たとえば、ジョージ・ソロスと懇意のハンガリー人と私は友人だから、ソロスを介してアメリカ大統領につながる経路を見つけることは簡単だ。ブダペストのような小さな町では2~3名の人を介せば当該人物にたどり着ける。ブダペスト2区建築課の主任建築士の名前を調べ、友人の工科大学教授を通して建築科の教授の意見を仰いだ。すぐに回答が届いたが、「この主任建築士は融通が利かず頭の固い難しい人物として良く知られている。12区だったら助けられたのに」という。申請を手伝った建築士も、「他の区の建築課の仲間でも、2区の主任建築士は意地悪(gonosz)人間として良く知られていて、彼に話ができる人物を建築士仲間で探したが見当たらない」という。

こうなったら仕方がないと腹を決め、10月初めに申請書を提出した。数週間経て、「申請料の2万Ft分の印紙が貼られていないので、受付が完了していない。法律によって申請受付から45労働日の間に決定を出すことになっているが、当該案件は未受領の状態ですらに都市計画委員会に付託された場合に、その期間は審査期間に含まれない」という四角ばった書留通知があった(書面を寄越す前に、ちょっと電話してくれば良いものを)。建築士が9月初めに予備交渉を行ってから、ようやく10月28日に申請書類が受理された。

都市計画委員会

ベランダに屋根を付ける程度のことなら、建築課で判断可能な事柄である。しかし、とくにコネのない私の案件は、区の都市計画(専門)委員会に諮られることになった。ここに諮られる案件のほとんどは却下される。

所用で委員会を傍聴できなかったが、改築内容を説明した建築士から委員会の様子を聞いた。「ガラスのベランダは寒さを防ぎ、エネルギー節約になる」という説明にたいし、専門委員の一人は「ベランダというのは、夏は暑く冬は寒いものだ」という卓見を披露したという。もう一人の委員は、「美観は今のままの方が良い。隣家と一緒に申請し直したらどうか。ところで、家の玄関にある庇は許可を得ていないのではないか。あれは見かけが良くないから、隣家と共同でベランダを改築する時に、それも一緒に改築したらどうか」と、余計なお世話までしてくれた。まるで公営住宅の審査のようだ。最終的に委員会は「ベランダの改築を許可しない」結論をだした。

もっとも、計画委員会の決定はあくまで参考意見で、役所の建築課は委員会と異なる結論をだすだけの裁量権をもっている。だから、この時点で袖の下を使うことができれば一件落着になったのだが。

1月中旬の計画委員会の後、この案件はさらに1カ月半以上も放置され、法的期限が切れる3月1日付けで、ブダペスト2区建築課の結論が3月中旬に届けられた。厳しい冬が過ぎ、予備交渉を行ってから半年経た結論である。この間、建築課の担当者も計画委員会の専門委員も現地に出向いて現状を確認することはなかった。結論の根拠は、「双子型の家の形状変更になるから」というだけである。この結論を出すのに、4カ月も必要ない。

さて、どうする

知り合いの弁護士に相談した。隣家にお金を渡して、建築に賛同してもらうのが一番簡単だという。しかし、それはやりたくない。もう面倒だから罰金覚悟で改築を始めようと考え、業者に資材の搬入を依頼した途端に、隣家の夫婦が飛び出してきた。建築課の決定は隣家にも送付されていた。「許可がない建築だから、役所に訴える」という。「隣が改築されれば、自分の家の価値が下がる不利益を得る」というのだ。やっぱり、こんな隣人なら、時間がかかっても、正式に許可を取るしかない。

建築不可の決定書を受け取ってから、再審査要求書の提出に10日の猶予がある。急いで長文の要請書を認めた。「双子型だ

からというだけの理由で却下するのに、どうして4ヶ月もの時間がかかるのか。これだけの時間をかけながら、誰一人として現状確認にきていない。これが市民に奉仕する自治体の仕事と言えるか。現状確認を怠り法律の機械的適用で結論を出すのは、官僚主義そのものである。双子型の家屋とはいえ、隣家と我が家の敷地は形状も立地も異なる。門塀の材質・色も外壁の色も違い、双方の家屋部分は高い樹木によって覆われており、双子型の形状を認識するのが難しい状況にある。隣家の門塀が赤色に彩られているが、趣味は悪いとは思いますが、我々はまったく気にしない。しかも、隣家との境は3mもの高さの樹木の壁で二つの家屋部分は隔てられている。こういう物件にたいして、規則の機械的適用は誤っている。アンドラーシュ通りや薔薇が丘の邸宅ならともかく、我が家はブダペスト市と隣町の境に位置する家屋である。通りすがりの人のために原型を維持することが必要だとは思われない。しかも、却下の根拠になった計画委員会の意見はきわめて無責任であり、エコ技術でもある北欧の「ガラスのテラス」の価値をまったく分かっていない。委員はあたかも我が家を公営住宅であるかのように議論しているが、いったい我が家は誰のために存在するのか。計画委員や通りすがりの人のために存在するのか、それともそこに住む住人のために存在するのか。建築委員会の結論は住民の正当な権利を侵害するもので、受け入れがたい。

差し戻し

3月末に送付された再審査要請書は上級機関(中部ハンガリー管理局)に送られ、その審査決定が5月20日付けで下された。結論は、「第一審決定を取り消し、第一審のやり直しを命じる。再審査申請に徴収した3万Ftは申請者に返却する」。決定理由が二頁半にわたって記され、私の反論には「説得力がある」と記されていた。

この完全回答はやや意外でもあった。しかし、そこまで主張を認めたなら、即座に許可を与えても良いではないか。ところが、ハンガリーではまるで裁判所の判決のように、下級の審査が再び開始される。郊外の家々のテラスに屋根を付けるだけのことに、これほどの労力と時間をつぎ込むのは馬

鹿げていないか。どう考えても税金の無駄遣いだ。

しかし、またしても下級の役所の対応は悪い。2区の建築課から再審査の決定がいつまで経っても届かない。上級機関が明瞭な判断を下したのだから、現状確認して決定すれば済むことだが、審査期限が切れる7月末が近づいても何の音沙汰もなかった。それなら、下手に催促するより、法的決定期限45日を過ぎるのを待つのが得策。期限が過ぎれば、申請者に有利な許可以外の決定は出せないからだ。

審査期限が切れた7月末日に、友人の法律家が2区の建築課に審査の現状を電話で問い合わせた。ところが、建築課の誰も我が家の案件の書類を見つけないことができない。担当者が休暇から戻る翌週に調べるといふ。期限直前に書類を出して決裁するのが役所の労働慣行だが、書棚のどこかに置きっぱなしで、決裁期限が過ぎたのも忘れていたようだ。

8月初め、再び友人が催促の電話を入れた。「この件はすでに法的期限が過ぎている。明らかに業務怠慢ではないか。こういう状態なら、民事訴訟を起こすことも考えざるを得ない」と。これに驚いた建築課は主任建築士が不在だったにもかかわらず、助役顧問の名前で急いで2通の書留通知書を認めた。一通は、「当該案件の審査が長引いているので、審査期間を20日間延長する」という審査延長通知(法的期限が切れる7月26日に遡った日付で、8月11日の消印)で、二通目は「現状確認をおこなった結果、当該改築は家屋の外観を変えるものではないと判断できたので、改築を許可する」(8月3日付けで、8月11日の消印)という決定書である。この2通の書留を一緒に送付してきた。

袖の下を通さないと、こんな些末な案件でも1年近い時間がかかる。民事訴訟になれば数年は覚悟しなければならない。それにしても、ハンガリーのお役所仕事はお粗末限りない。ハンガリーの自治体はÖnkormányzat(self-government)というが、とても住民の利益のために働いているとは思われない。旧体制の役人主権はいまだ健在だ。

(もりた・つねお ハンガリー立山研究所)

大空への挑戦(準備編)

加藤 詩乃

みなさん、こんにちは。ただいま、9月25日。名古屋からヘルシンキへ向かうフィンランド航空の機中です。これからヘルシンキを経由しブダペストへ向かいます。ハンガリー・デブレツェンで開催される熱気球世界選手権(10月2日～10日)に参加します。

今回、『ドナウの四季』にスペースをいただける事になり、スカイスポーツの一つである「熱気球競技」とその世界選手権について、「どぶ板」活動をご報告したいと思います。

～競技～

熱気球を実際にご覧になったことはなくても、映像や歌や写真などに「風まかせ」のロマンティックな乗り物として登場するので、皆さんご存知かと思います。空を風に乗って飛ぶ事を楽しむファンフライトや、長距離や山岳フライトなどのアドベンチャーフライト、そしてターゲットにいかにか近づけるかを競う競技フライトなど、熱気球のフライトにも様々な種類があります。

熱気球の大会は、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなど世界各地で開催され、日本でも佐賀をはじめ各地で行われています。これらのレースに出場している選手にとっては「競技」ですが、一般のお客さんから見ると、季節の風物詩。色とりどりの熱気球が、空にふわりと浮かんでいる、鮮やかな美しい世界です。

ここに紹介する写真は2006年にドバイで開催されたバルーンフェスティバル。そして、アジア最大規模(観客動員数では世界最大)の熱気球大会「佐賀バルーンフィエスタ」の写真です。今回、ハンガリー・デブレツェンには、120機もの熱気球が集まります。世界各地の国内予選を勝ち抜いてきたトップレベルのテクニクを持つパイロットが集まります。

世界選手権では、「いかに正確に飛ぶか」を競います。熱気球のフライトは風まかせ

です。しかし、風は高さや時間の経過によって異なる方向に吹いています。その見えないう風を各種データと経験から予想し風をとらえます。たとえば5キロ離れた距離から目標となる地点までフライトし、数センチメートルの単位まで寄せるといった、高い精度を競います。

熱気球競技は、気球に乗るパイロット



2006年ドバイ・バルーンフェスティバル ドバイ好景気の最中、ドバイ政府が全世界から100機以上の気球を招待(航空券から滞在まで)。

と、地上で支えるクルーのチームプレーです。ただ「スポーツ」というよりは、近年では各種計器や測定器・パソコン操作なども絡み、かなり複雑な頭脳プレーも混在したゲーム性の高い競技です。目標地点に向かって正確に飛ぶといった面ではゴルフを三次元競技にしたようなイメージ。そこにF1のようなチームでの役割分担が必要となる競技。そんなイメージでしょうか。

日本選手はまだ世界選手権で優勝したことがありません。

～熱気球の歴史～

1783年フランス・リヨン近郊で「モンゴルフィエ兄弟」による熱気球フライトが人類初となります。国土の広いヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアはじめ、各国で熱気球愛好家が活動しています。特に、ヨーロッパでは「貴族の遊び」として定着してきたとも聞かれています。

日本の熱気球の歴史は、1969年にはじまりました。第二次世界大戦が終わり、日本が経済成長に突入した1960年代、日本エッセイ

でもスカイスポーツへの関心が高まってきました。当時京都の学生だった「島本伸雄」、「梅棹エリオ」によって製作された手作り気球「イカロス5号」が日本初の熱気球として飛行に成功し、日本中を沸かせました。梅棹エリオさんは今年ご逝去された梅棹忠夫先生のご子息です。当時の国内に熱気球のノウハウは皆無。暗中模索で熱気球の技術を探り、資金繰りに東奔西走しながら、1969年9月27日「イカロス5号」の飛行を実現させました。このように日本の熱気球スポーツは、どちらかというと学生の活動からスタートし、やる気と情熱さえあれば誰でも参加できる世界です。

それから40年。ヨーロッパなど各国からは大きく遅れをとったスタートでしたが、日本の熱気球の競技レベルもぐんぐん上がり、今回の世界選手権には日本

人パイロットは7人と世界各国の中でも最多のレベルとなりました。天才的なフライトテクニクを持つ2世パイロットも誕生し、今回こそ日本選手の優勝をと意気込んでいます。

～大会準備～

熱気球の海外競技に参加するためには、さまざまな事務作業・テクニク、そして「コスト削減」が最大の課題となります。コスト削減を意識すれば、自ずからハンガリーの会社や個人との直接交渉にならざるを得ず、非常に地道で粘り強い作業になります。昨年11月、国内選考によって7人の代表選手が決まり、日本チームが発足しました。しかし、「熱気球世界選手権 日本チーム」と言っても、事務局のような組織はありません。

世界選手権は2年に1度開催されず。2008年はオーストリア、今年はハンガリー、2012年はアメリカ合衆国で開催予定です。大会本部に頼ることができる準備部分もありますが、多くは選手たち自身で

解決しなければならず、特に今回の世界選手権は、デブレツェンの大会本部側の問題が山積みの中でスタートしました。

デブレツェンは2006年頃に「2010年世界選手権」に立候補し、2008年冬に開催が決定されました。当時は、デブレツェンの街も潤っていて、企業スポンサーも手を上げていたと聞いています。しかし、その後、リーマンショックからの経済危機に。当初は10月開催ということで国際航空連盟から承認されていましたが、昨年11月頃、デブレツェン側から急遽8月開催への変更の意向が示されました。8月ならフラワーカーニバルなど夏のイベントと重ね、一般のお客さんの観光誘致がしやすいからという理由。しかし、イギリス・アメリカはじめ各国は8月に国内選手権を開催するため、「絶対駄目!」と却下したのだそうです。

一時は、開催自体が危ぶまれるような状態でした。日本チームにも、「開催されるかわからない」、「8月になるか10月になるかわからない」と不安定な情報が届きました。すったもんだで、ようやく今年3月に、エントリーフィーを400ユーロから、600ユーロに上げるということで、秋開催に決着しました。ざっと見積もって600ユーロ×150チーム(競技130機+フェスタ部門)=90,000ユーロ。これで最小限の大会運営はできます。オフィシャルパーティーや飲食で地元還元される分もありますから、大会を主催する

デブレツェンには少しばかりの収益も得るはずですが、4月末のエントリーフィー締め切り以降は、何の音沙汰もなく、本当に、世界選手権は開催されるのだろうかとの声もちらほらと出る始末。それでも、準備活動を停滞させるわけにはいきません。

世界選手権までに辿り着くまでの選手側の準備は、大きく分けて、①フライト手配、②宿泊手配、③機材空輸、④レンタカー手配があります。フライトと宿はとて簡単です。インターネットを使い、より安く快適

で、体調管理をしやすい場所を選びます。日本人チームは二つの宿に分かれ、30名程で小さなホテルを借り切り、残りはキッチン付のアパートを借り切りしました。アパートは13人で13泊1252ユーロです。この金額からお分かりのように、これが日本チームの金銭感覚です。

大変なのはレンタカーと機材輸送。まず、熱気球を運ぶことができる車が必要となります。今回は7台のミニバスかダブルキャブ、数台の乗用車を探しました。もちろん、安いことと信頼できることが条件です。大会主催者の斡旋を待つこともできますが、それはあまり期待できないと思い、昨年かから地道にリサーチを続けました。手段はもっぱらインターネットです。ハンガリー語のサイトが多いため、自動翻訳機を使い、およそ30社と連絡を取りました。

VW Transporter、Mercedes Vito、Ford Transitなどが該当車種となります。大手レンタカー会社が、「870 EUR



佐賀バルーンフィエスタ アジア最大の熱気球大会。11月 秋の佐賀の風物詩。

for seven days, 125 EUR for each extra day after that」。個人経営だと思われる小さな会社だと、1日7,000HUFほど。レンタカー会社の方の丁寧な対応、会社の規模などから、「よし、ここだ」と、Cargorent Kft.という会社をお願いすることになりました。気球を乗せるために、3列シートで3列目を取付金具ごと取り外してもらい、床を保護する板を敷いてもらう、レンタカーを借りる当日ブダペストの宿泊施設まで迎えに来てもらう、カーナビはエッセイ

おまけで・・・などなどの結果、7台のFord Transitと2台のSuzukiを16日間レンタルし、5,800EURとなりました。

といっても、レンタカーを受け取りに行くのは、明々後日です。果たしてちゃんと希望した車両があるかどうか。きっと大丈夫でしょう。ハンガリーの担当者の女性の細やかな対応、そしてメールから伝わってくる誠実さを信じています。

そして、大変なのが機材の空輸。今回は1,200kgの輸送です。代表パイロットの一人が今年になってから空港の運送会社で夜間アルバイトをしてコネクションを作り、そこで見積りをとった後に相見積りを取ったりして、最終的に日通航空さんをお願いすることになりました。カルネを自分たちで作成し、あの手この手を使い、とりあえず日本からハンガリーの片道1,200kgを70万円。高いのか安いのかよくわかりませんが、とりあえず数日前にブダペストに到着し、無事輸入許可も下りたとのこと。ほっと一安心です。

～ロシア上空から～

ブダペストのサマータイムに変更したパソコンの時計が11時を指しています。名古屋を離陸したのは日本時間で11時でしたので、7時間飛んだことになりますね。

今日は、ブダペストに到着した後、盛田常夫さんにお会いします。明日26日、うちのチームはブダペストマラソンの駅伝部門に参加です。なぜ、盛田さんと

お知り合いになることができたか。それはハンガリーの様々なリサーチの一環で、盛田さんのお名前を昨年か何度も目にし、ついにはメールを出してしまったからです。こうしたリサーチの結果はどう実を結びましょう。

次号では準備・手配の結果や熱気球競技の結果をご報告します。(かとう・しの 熱気球世界選手権 日本代表チーム)



パットの名手はパターを変えない

柿崎 広好

昨年11月29日よりハンガリーに駐在となり、迷わずハンガリー日本人ゴルフ部に入部。春の訪れと共にハンガリーでのゴルフがスタートしました。ホームコースは「パンノニアG C」。ハンガリー屈指の難コースです。日本のゴルフ場との大きな違いは、とにかく速い「高速グリーン」だと思います。日本のゴルフ場の感覚でプレーをすれば、平均パット数が3打～4打違うのではないのでしょうか？

パットが入らない理由は大きく分けて二つあります。一つ目はラインの読み違い。例えば左に曲がると思ってカップの右を狙って打ったが、逆に右に曲がった。これはどんなにうまく打っても入りません。そもそも入るはずがない所に向かって打っているのですから。もう一つはミスパット。8mの距離を6mしか打てなかったり、カップの右を狙って打ったつもりが左に引掛けたりと言うケース。頭のミス(読み違い)と体のミス(ストロークミス)と言えると思います。私の場合はまだまだ未熟なので、この二つが共存しています。読みが悪い上に、狙ったところに打てない。そこで、まずはこのパンノニアG Cの高速グリーンに合うパターを見つけ出そうと思い自分が日本から持って来た数パターを試してみることにしました。まずは日本で主に使っていたエースパターのベティナルディMC-7。ゴルフショップの店員に「良いパターは手の平の上でバランスさせた時にフェース面が真上を向きます。フェースバランスと言うのですが、これができているパターは少し芯を外してもミスを救ってくれます。このMC-7はピンタイプのヘッドをロングネックにしてフェースバランスをとっています」と言われ5万円以上も出して買ったパター(この値段は奥さんには内緒です)。皆さんも一度、自分のパターで試してください。フェースがスッと真上を向きますか?あれー上を向かない?ご心配なく。あのジャンボ尾崎プロ使用のL型パターも上を向きません。

最初はこのエースパターをバックに入れてパンノニアグリーンとの対決です。練習グリーンで試してかなりの高速グリーンとわかっていたので、距離感はまだまあ。しかしショートパットを外してばかり。パンノニアの高速グリーンの前に3パットの連続。女子プロの宮里藍ちゃんが一時ショートパットの方向性を出すためにクロスハンドにしていた事を思い出し、クロスハンドも試してみました。がうまく行かない。ついにご主人様に嫌われ交代。次の出番は長さ46インチの長尺パター。オデッセイホワイトホット。もちろんフェースバランスとれています。その上、センターシャフトと言ってパターヘッドのほぼ真ん中にシャフトが刺さっている。通常パターのシャフトは手前側に刺してあり、先端側でボールを打った場合はフェースが開く気がするのですが、このセンターシャフトはその心配がない。方向性に対してはMC-7と比較して絶対的なアドバンテージがあります(あるはずです)。長尺パターは胸のところで左手を握り、シャフトの真ん中辺りを右手で握ります。ストロークは、

ほうきで掃くイメージに近く、左手が支点になって振り子のようにストロークされるため、方向性抜群(のはず)です。「よし、これでパンノニアグリーンと勝負だ!」と期待に胸を膨らませて持ち込みました。ところが長尺は距離感が出せない。ファーストパットが寄らない。結局3パットの連続。方向性は良いけど距離感が出せない。またしても短気なご主人様に嫌われ交代。

次はパットの名手ブラッドファクソン使用の名器スコッティキャメロンのラグーナ。MC-7を買うまで長年使用していた思い出のパター。「君ならきっと今の僕を助けてくれるよね。何しろ一番長い付き合いだからね」とパターに語りかけ、いざ出陣。しかし、結果は同じ。寄らず、入らず。3パットの連続。もうどのパターを信じて良いのかわからなくなった。「これじゃパンノニアのグリーンに勝てない」と怒りに震えていた時、「ん?待てよ。パットが入らないのはこれらのパターに問題があるからなのか?どのパターを使っても結果が同じと言うことはパターに問題はないのではないか?そもそもパットが寄らない、入らない真因は何なのか?それがわかっていないのではないか?」。仕事では「真因を追求しろ!真因なくして対策なし」なんて言って指導しているが、自分が真因追究できていないのではないか?確かにパンノニアのグリーンは難しい。でも都合よくパンノニアに合うパターなんて存在するのか?そしてわかったのです。すべての問題は自分の腕の無さにあるということ。

うまく行かない理由を道具の責任していた自分と決別して本当の対策がスタート。不調の原因であるショートパット対策。「ショートパットは耳で聞け!」と言われる。これは結果(カップに入るか?入らないか?)を気にするあまり、打つ瞬間からカップの方に視線を向けてしまうために体が左へ開き、結果的に左へ引掛ける現象を防止するための言葉。カップインの音がするまで顔を動かさない。体を開かない。球を追わない。これを肝に銘じて実践。頭が動かなくなった。体も正面のままですトロークできるようになった。

もう一つ「ショートパットは反対側の壁に当たるくらい強く打て!」と言われる。これはカップインしたボールを拾い上げる際、カップ周辺を何十人という人が踏んでボールをカップから取り出す。午後になればカップの周りにはへこんで来る。弱いとこのへこみの影響でカップからボールが逃げる。カップに嫌われる。だから影響を受けないように少し強目に打つ。「強めに打って入らなかったら」と不安な気持ちを吹っ切り、自分を信じて強めに打って行く。これらを実践して行くにつれて少しずつ改善。やはり問題は自分自身にあった。

ある雑誌にこんな記事が載っていた。「パットの名手はパターを変えない」。時代を築いたパットの名手には名器と呼ばれるパターがあるそうです。私はベティナルディMC-7をパートナーとし、パンノニアの高速グリーンに挑みます。もう浮気はしません。最後は精神力を含めた自分の技量なのですから!最後まで読まれた方、あなたもきっとパットがうまくなりますよ!

(かきざき・ひろよし マジャール・スズキ)



バドミントンの記憶と出会い

植條 公士

人はどちらかという楽しかったことはすぐに思い出せるけど、辛かったことは思い出したくないからか、なかなか思い出せない。

私がバドミントンを始めたのは中学一年生の時。それまでスポーツには全く縁がなかった私はスポーツ系クラブ一覧を眺めながらこの中で一番楽しそうなのはどれかと考えて選んだのがバドミントン部だった。しかしその選択が間違いだったことに気がつくのに1週間もかからなかった。

一般的に水泳と同じくらいのカロリー消費を必要とされるスポーツ。スピーディなラリー、激しい強度の運動を長い間維持しながら作戦を練る。バドミントンは激しい運動をしている時間と休んでいる時間が交互に繰り返されるスポーツ。つまりダッシュを繰り返しているようなもの。心拍数が激しく上下する。私の頭の中にあつた外で親子がポーンと羽を打つなんて想像はあつというまにかき消された。

毎日30km以上のランニング、20本以上のダッシュ、1時間ほどのノック、うさぎ跳び、試合・・・練習が終わった後は自転車を漕ぐのも辛い毎日。高校の部活対抗マラソンでは野球部やラグビー部を抜くほどになっていた。練習が辛くて辛くて何度も辞めようとした。

大学に行つてからはスキーやバイク、お酒と巷の大学生が夢中になっているものに打ち込み始め、社会人になり結婚、子育てと、たまに家族や友人とでゆったりする程度で競技バドミントンをやっていたなんて忘れかけていた。だけど約20年がたった今、バドミントンは日本から遠く離れたハンガリーで再度自分の心を震わせている。おそらくいつも心の中にあつたほんの小さな火種が小さな風を受けたに過ぎないのだろう。辛かった思い出はずっかりと影を潜めバドミントンをやっていた楽しい思い出が私を突き動かした。

きっかけとなったのは大吉の飯尾さんを紹介役として募った3人。まず場所から探すことになった。バドミントンはハンガリーではマイナーなスポーツということはスポーツショップに行つてもテニスラケットの隅に置かれている程度いうことで容易に想像が付く。夏前から探していたが夏休み休館や場所が遠いなどようやく場所の確保が出来たのは2009年10月だった。

久しぶりに経験者の方たちと手を合わせる。まず一番驚いたことは自分の知っているルールが変わっていたこと。2006年からサーブポイント制の15点3セットからラリーポイント制21点3セットに変更になっていた。またラケットも進化しており軽く、10mm長い物が主流となっていた。

そういえば中学一年生の頃、部活を始めるからといって親に買ってもらったラケットは木製のフレーム。当時もカーボン製などあったが当時最高峰の性能を持つラケットが安価で入手できたことも驚きだった。どれだけ浦島太郎だったんだろうと思ひ知つたものの実

際にプレーするにつれて徐々に過去の動きを思い出していった。

そして創部以来、いろんな方がバドミントンをやりたいと声をかけてくださり、今楽しく一緒にプレーを楽しんでいる。ハンガリーでバドミントンというスポーツに興味を持ち始められた方、ハンガリーに在住する前に海外でやられていた方、様々だ。またその敷居の低さから毎回数人の子供たちも自由にバドミントンを楽しんでいる。子供から大人までが気軽に人の輪を増やせるスポーツは実はそうそうない。

バドミントンはフットワーク、ラケットワーク、ボディワーク、頭脳ワークという4つのワークが必要。

どれかひとつを鍛えることで、極端な例でいうと小学生が大人に勝つことだってある。もっぱら私などは、高校生の時のような体力は影を潜めればなしで年齢を重ねる事にラケットワークと頭脳ワークに磨きがかかり、人の嫌がる場所にシャトルを落とすという性格の悪いプレー(笑)が得意となっている。ただそのような特性から生涯スポーツとして皆に慕われているのも事実。

隣の国、オーストリアではバドミントンはとっても盛んなスポーツ。オーストリアの首都ウィーンにはバドミントンの専用コートを持つスポーツセンターが数多くある。ウィーンにも日本人バドミントンクラブがあり、今では時折情報交換を行っている。ウィーンでは多数のバドミントンクラブがあり交流を絶え間なく行っている。年に一回はアジアフレンドシップカップと呼ばれる中国人、日本人、ベトナム人、タイ人が揃ひ交流試合を催す。

今度は国も言葉も文化も違う人たちとの交流。お誘いを受けハンガリーからも2名参戦した。3セットの勝負は久しぶりで心臓がバクバク、最後は膝が笑っていた。結果は自分で言うのもなんだが2戦とも惜敗(もう一人の方は1勝1惜敗)。でも応援してくれた家族や異国の人たち、辛い思い出よりは良い思い出の方が私の心には刻まれた。

ハンガリーのクラブでは初心者も多いためシャトルを打つというシンプルな楽しさの行為を追及するべく活動している。練習で体を温めたあとに試合を中心に楽しくプレー。サークルでは対戦相手をじゃんけんやグーパーで決めるので、強制的に(笑)様々なレベルの人と当たることもある。ときには経験者であったり、ときには子供であったり。様々な分野で活躍するハンガリー在住日本人の方々との交流は本当に楽しい。

また体育館を貸してもらっているハンガリー人の皆さんは外国人である私たちに分け隔てなく気持ちよく接してくれる。

ハンガリーに来て2年、バドミントンを通じて育まれた人の輪は今更に広がろうとしている。こんな体験は日本では出来ない。まだまだ私の知らないバドミントンの世界が待っていると思うとワクワクする。異国の地でバドミントンがくれた小さな奇跡。きっと自分の人生でかけがえのない宝物になると信じて。

(うえじょう・きみお マジャール・スズキ)

スポーツ行事・運動サークル情報

テニス部:冬季シーズン開始

10月第2週よりテニス部の冬季シーズンが開始。参加ご希望の方は以下の代表者までご連絡をお願いします。冬季は暖房完備されたテント内でテニスをしますので、寒いのが苦手という方でも思いっきり汗が掛けますのでぜひご参加下さい!

土曜チーム: 経験者を中心に3時間練習・試合をしています。

場所: ヴァーロシュマヨールテニスコート

時間: 毎土曜15:00~18:00

冬季開始日: 10/9~

代表: 杉本: arpad1162@yahoo.co.jp

日曜チーム: 初心者から経験者まで気軽に参加し、試合を中心に活動。

場所: マッチポイントテニスコート

時間: 9:00~11:00

冬季開始日: 10/10~

代表: 的場: h-matoba@exedy.com

バドミントン部

新入部員大歓迎です。

参加される方はご連絡お待ちしております。

①現在の部員数: 大人25名、子供10名

②活動場所と時間帯

場所: プダベスト2区、Kokeny u.44

日時: 毎週日曜日の午後4時から2時間

③代表者と連絡先

代表: 植條 公士 携帯: +36-20-665-0910

問い合わせ先: hujpbad@gmail.com

ランニング・レース情報

日本人学校で主要なレースへの参加をとりまとめています。レースに参加希望の方は、日本人学校野田先生にご連絡ください。

ウィーン国際ハーフマラソン大会(4月11日)記録

江洲 泰久 1時間42分42秒

本田 雅英 1時間46分17秒

プダベスト国際ハーフマラソン大会(9月5日)記録

西岡 健児 1時間40分04秒

仲川 寿一 1時間52分32秒

菊池 智裕 1時間54分33秒

本田 宏子 2時間16分15秒

安島 昇 2時間20分07秒

2010年ウィーン・マラソン大会に参加した江洲一家

ゴルフ部

現在の部員数は約50名。月例会やマッチプレー等の公式行事の他、毎週末や祝祭日にはゴルフ狂が集まるプライベートなコンペを楽しんでいます。

月例会結果

<日付>	優勝	2位
7月11日	金広(ユーラシア)	宮崎(日清食品)
8月1日	増田(ダイヤモンド電機)	平松(住友商事)
9月5日	山内(菱和)	栗原(スタンレー電気)
10月予定	10月10日(日) 08:00~	
11月予定	11月7日(日) 07:40~	2010年最後の月例会

第12回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(春季)結果

5月~7月

優勝: 成沢(伊藤忠) 2位: 岡崎(菱和) 3位: 平松(住友商事)

第13回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(秋季)途中経過

8月~10月

ベストエイト進出: 成沢(伊藤忠) vs 山内(菱和)、阿部(大気社) vs 鈴木(ユーラシア)、岡崎(SEWS) vs 三木(伊藤忠)、町野(スズキ) vs 柿崎(鈴木) <9月18日現在>

年代別対抗戦(第一回)7月4日(日)

PANNONIA G.C. 上位3名の合計打数

優勝: 50歳台 226打(宮崎、栗原、成沢、陸川)

2位: 60歳代 251打(町野、飯尾、岡崎真、岡崎良、高濱、高橋)

3位: 20~30歳台 255打(金広、阿部、山内、古川)

個人優勝: 宮崎(日清食品) 44+43=87 HCP 11 Net 76

秋季ソフトボール大会(商工会主催)

2010年秋季大会の結果(9月26日) 15チーム、228名参加。

優勝 アルパインチーム

準優勝 ソニーチーム

3位 商工会Bチーム

最多ホームラン賞 西城貴満

MVP(男性) むらき(アルパインチーム)

MVP(女性) 鈴木由香(アルパインチーム)

MVP(小学生) 鈴木いちろう(アルパインチーム)



森 よしみ

忘れもしない補習校最初の授業、自由奔放娘が教室から脱走しないかとひやひやしていた。しばらくしたら、ダダッと階段を駆け下りて外に飛び出していき1年生、もちろん先頭は私の娘。「ああ、やってしまったか」と思ったが、授業が終わって休み時間になったので外に飛び出したというのでほっと一安心。

4月に補習校に入る子どもたちのほとんどは9月に小学校入学なので、それまでは幼稚園の年長さんをしながら土曜の午前中だけは補習校で小学1年生。まだまだ甘えんぼだし、月曜から金曜まで幼稚園でお勤めを果たしておつかれのところ、土曜の朝から4時間の授業をこなせるのか、正直かなり

心配だった。でも、親の私には「勉強やだ」と言いつつも、幼稚園のお友達や近所のおじさんおばさんには、補習校に通っていることをとても自慢げに話している。大好きな先生、お友達と会えるのがうれしいし、字を習うことも楽しいというから、勉強がきらいというのはきつと、宿題をするときに私が目を吊り上げてぎゃーぎゃー言うからだろう。と反省しつつも、本読みをはじめて2行目くらいで「つかれた、」とか、「今日は3回じゃなくて1回にしてもいいんじゃないかなあ、昨日も読んだし…」とかぶつぶつ言い出すと、どうしてもドカンと爆弾投下してしまう。。

若かりし日、ハーフの子どもは何の苦勞もしなくてもバイリンガルになれていいなあ、と、勝手に羨ましく思っていたが、本当に2ヶ国語を母国語レベルでマスターすることがどれだけ大変か、自分がこういう状況に置かれるまで全く想像していなかった。我が家の場合、私に何かあった時の娘の行き先は日本ということになるので目標は高く、日本の学校にいきなり入れられてもなんとかかなる程度、つまり日本語も母国語として身につけてほしいと期待している。

娘が産まれてから私は日本語でのみ話しかけるようにしていたにもかかわらず、フルタイムで仕事をしていたので、2歳半くらいの時点ではハンガリー語で過ごす時間が1日のうちのほとんど。私が日本語で問いかけてもすべてハンガリー語で返事が返ってきていた。その後、同じ年の日本人のお友達ができて時々一緒に遊ぶようになってから、大好きなお友達に思いを伝えたい一心だったのだろう、いつのまにか自然な日本語を話すようになっていた。

普段の生活で日本人と会うことの少ない娘は、公園などでアジア人の子どもをみると「ママ、日本人の子がいるからお友達になってくるね」と、走っていく。日本人じゃなかった、と、すすすこと戻ってくることも多いが、日本人であれば2分後には本当にお友達になっているところはさすが子ども同士。日本語で話ができるのがうれしいらしい。ただ、大きくなれば道で日本人をナンパして話しかけるということもかなり無理があるし、同じような環境の子どもたちと一つの学校で過ごすことも補習校の大きな価値だと思って通わせることを決めた。

通い始めて半年、先生はとても優しいクラスのお友達とも仲良くしてもらって、いまでは土曜が来るのを毎週楽しみにしている。仕事でときどき送り迎えさえ自分でできないときもあるような状況だが、親の私にとっても、補習校の子どもたちやお父さん、お母さん仲間と話ができることが大きな楽しみになっている。

トンポシュ 典子

今年の春から長男が補習校の1年生として楽しく通わせて頂いています。

しかし昨年秋、補習校の見学の案内を頂いた時、我が子が入学することなど考えてもおりませんでした。その理由は3つ、我が家の言語はハンガリー語、英語が中心で日本語を使う機会は少なく、また普段の生活もハンガリーにとっぴりと漬かっており、いきなり補習校に入って大丈夫かしら。また土曜日(週末)は家族でゆっくり過ごすものと思っている主人とその家族に理解

みどりの丘日本語補習校

してもらえるかしら。9月からはハンガリーの学校も始まり、ちゃんと両立が出来るかしら。大丈夫かしら、出来るかしらと考え

てばかりの堂々巡り、いつの間にか自分の中で入学することは無理と決めつけていました。

そんな時、先に補習校に通っている保護者の方から、見学するだけでもいいからと声をかけて頂き、自分の中でもこれが最後のチャンスかもしれないと見学に行かせて頂きました。案の定、日本語での授業は全くわからなかったと残念そうな長男、絶対に補習校には行きたくないと言われることを覚悟していました。しかし小さな口から出てきた言葉は、憧れの学校に通えるがうれしい。予想外の言葉にビックリしたものの、気に入ってくれた事が私自身も本当に嬉しく、親子で頑張ってみようという入学をする決心ができました。

4月の入学式、そして初めての授業を終えての帰り道、日本語が殆どできない長男が車の中で楽しそうに「ピカピカの1年生♪~」と歌っているのです。自分が選んだ道とはいえ、慣れない土地での育児、家事、仕事等、今までの色々な思いが重なり、感無量、涙が一気に溢れてきました。

あっという間に1学期が終了、たった3ヶ月の間に、ひらかなの50音を覚え、日本語の絵本を一人で読めるようになりました。休むことなく無事に通えたのも、一緒に頑張れるお友達がいたこと、また日本語の語学力に差があるにも関わらず、個々のレベルに適した温かい授業づくりをして下さった先生のお陰だと思います。いよいよ2学期、同時にハンガリーの学校も始まりました。2つの学校の両立はやはり思ったよりも大変ですが、不思議にも長男からやめたいという言葉は出てきません。限られた時間の中で集中して宿題できるように工夫する中、我が家でも日本語を使う機会が少しずつ増えています。気が付くと子供たちから教えられる事が多く、私も1年生になったつもりで、一緒に成長できればと思います。



一人暮らしを始めて

ハンガリー国立バレエ学校
三浦 志乃

今年でハンガリーに来て3年目になりました。高校1年生の時にNBA全国バレエコンクールでハンガリー国立バレエ学校からスカラシップ賞を頂きバレエ留学することになりました。まさか賞を頂けるとは思ってなくて実は家に帰ってしまったのです。連絡があり急いで会場に向かいました。母と本当に私?と驚きながら話していたのを覚えています。(笑)

小学校2年生の時に母が憧れていたバレ



エを勧められ、それが始めるきっかけとなりました。高学年になりコンクールに挑戦するようになってからバレリーナになりたいと思うようになりました。ハンガリーに着くと私は驚きました!見渡すと世界遺産だらけ!こんな素晴らしい国に来たなんて信じられませんでした!しかし世界一難しいと言われるハンガリー語…。バレエ学校の掲示板も読めず、先生の注意も良いのか悪いのかも分かりませんでした。今はハンガリー語が分かるようになります。クラスメートと笑いあったり、時には相談を受けたりなどいろいろなことが話せるようになりました。街中で迷ったり、分からないことがあってもすぐ声をかけてくれてハンガリーの人々はとても温かい!

バレエ学校はとてもきれいでスタジオが12個もあるのにびっくり!初めてクラスメートを見た時スタイルの良さに驚きました。学校のレッスンはとても厳しく基礎の大切さを学びました。1年目にリハーサル中転んで剥離骨折してしまい2か月バレエを休むことになってしまいました。怪我をすると日本に帰らされると聞いたことがあったのですが、私の学校はケアをよくしてくれました。リハビリもしっかりでレッスン内容も変えて頂いたのが本当に助かりました。舞台に出る事が増えリハーサルの厳しさに毎日泣いていた時期もありましたが、本番前にはみんなが緊

張をほぐしてくれてたくさんパワーをもらいます。客席からの拍手の大きさ!プラボーの声!舞台が終わった後の感動と言ったら…。周りの人にNagyon jo volt!(とてもよかったよ!)と声をかけられると本当に嬉しくてたまりませんでした。むろん、次の日は先生からダメ出しがありますが。辛い時があっても日本の先生からのメールには何度も助けていただきました。高校やバレエスタジオの皆さんからもらった色紙はとても嬉しく、励みになるので部屋に飾っています!オペラ座でバレエ団の公演がたくさん行われていて学生証を見せると入れてくれるのでよく観に行きます。去年初めて白雪姫を観ました。白雪姫は可愛くとても綺麗で、小人たちは面白くて表現が凄いです!何回も見たいと思うような舞台でした。

2年間ホームステイでお世話になったママはとっても優しく料理も上手!なんでもやってくれるママでした。ホームステイ先が丘の上にあるので大変でしたが、窓から見える夜景が物凄く綺麗で大好きでした!日本の女の子と一緒にだったのであまりホームシックにはなりません。初めてのころは毎日のようにSkypeで母や父と電話していたのでそれも良かったのかもしれない。近くにはママと仲良しの日本の方がいて、その方にはとてもお世話になっています。素敵なお方でハンガリーの文化やマナーいろいろを教えてくださいました。料理を教わることも!今でも休みの日など会いに行っています。日本を離れると学ぶことがたくさんあります。私は6人家族で暮らしていたので、ハンガリーに来て1人になると家族の大切さを改めて感じ、ここまで育ててくれたのも父、母初め家族のおかげだと思います。先生や友達、たくさんの方に支えられていると感謝の気持ちでいっぱいです。

今は一人暮らしを始めていて自炊、洗濯、掃除いろいろ大変です。日本で普通にこなしている母ってすごいなとつくづく思います。これからもハンガリーで出会った友達や、先生方、お世話になっている方を大切にして恩返しができるように頑張っていきたいです。そしてハンガリー語を学べましたし、ハンガリーが大好きなので将来ここで踊れたらいいなと思います。

留学生

日本を出て医学を学ぶ
センメルweis大学
侯野 貴慶



医師になることを決心したのは、今から8年前、15歳の時です。子供のころから病気や怪我が多く、医師が

僕にとって、それは極めて自然な選択でした。喘息の発作が出た時も、ラグビーで怪我をした時も、大病にかかって生死をさ迷った時も、いつも隣には医師がいました。いつしかその白衣に憧れるようになり、今度は自分が苦しんでいる人を助けたいと思うようになりました。

初めは日本の医学部を目指して勉強していましたが、卒業後海外で最先端の医療を学び、日本に帰って活躍している医師の本を何冊も読んでいたうちに、いつか自分も海外に出て医療をやりたいと思うようになりました。そのためには医学だけでなく、専門性の高い英語力も必要になってきます。ならば大学から海外に出てみるはどうだろうか。何か効率のいい方法はないかと考えている時に、ふと出逢ったのがハンガリーの医学部でした。日本の医学部を卒業して海外に出る医師はいませんが、海外の医学部を卒業して、腕を磨いて日本に帰ってきた医師は聞いたことがありません。誰も試したことのないことに挑戦できる。その無限の可能性を追求し、かつて誰も走ったことのない道へ進むことで、閉ざされていた視界が一気に広がりました。

僕が在籍するセンメルweis大学には、英語・ドイツ語・ハンガリー語の3コースがあり、およそ35カ国から学生が集まっています。英語コースに在籍する学生は皆、母国を出て学びに来ており、勉学と真摯に向き合っている人が多いです。豊かなのは国際色だけではなくありません。看護師や薬剤師などの医療職を経て来る人、5ヶ国語を話す人、アメリカやイギリスの名門大学を卒業して来る人、国が定めた兵役を経て来る人など、個性豊かな仲間たちと一緒に勉強できることは、この上ない魅力です。クラス

二年目のハンガリー
リスト音楽院ピアノ科
清松 優記子

メートとのちょっとした会話から、地理や歴史、言語や宗教など、自分の知らない世界をたくさん知ることができます。

海外で生活する最大の目的は、日本に無いものに心を打たれ、日本を離れて失ったものに気付くことです。海外生活が長くなるにつれて、日本が世界屈指の経済大国であり、いかに便利で豊かな国であるか実感しています。世界を肌で感じる事が、日本という国の文化ないしは国民性を、より深く正しく理解することにもつながっていると信じて止みません。

近年、日本では絶対的な医師不足が盛んに叫ばれており、文部科学省は国公立大学の定員増や私立大学の新設など、頭を捻らせながら対策を講じています。一方ヨーロッパでは、自国で医師不足を解消するのではなく、中欧などの比較的学費の安い国で医師免許を取得し、母国に帰って医師になるという流れが何年も前から定着しています。ハンガリーの医学部を卒業すれば、自動的にEU27カ国で使える医師免許を取得できます。しかし、下手な医療者を世界に輩出することはその国の名が許さず、当然



道は険しくなってきます。それは歯科医師や薬剤師でも同様です。ひとつのライセンスを統一することで、医療水準を世界レベルに保っているのです。

現在、ハンガリー各地で何十人もの日本人が医学を学んでいます。僕たちが日本に帰る頃には、日本人が世界に出て医学を学ぶという道が、より身近なものになってきています。それは必ずや、閉鎖的な日本医療の殻を破る先駆けとなり、日本が世界水準で、本来平等であるはずの医学教育を改革する指標になれると信じています。

将来、世界各国がもつ優れた医療を日本に還元すると同時に、日本が持つ優れた技術も世界に広めることが僕の夢です。~Where there is a will, there is a way.~

私にとってハンガリーでの二年目の留学生活がスタートしました。

まだ始まったばかりですが、一時帰国した日本から再びこの国に戻って来た時「ああ帰ってきたなあ」という感覚になりました。たった一年生活しただけですが、もうここは私の中で第二の故郷になっているのかもしれない。今年は去年出来なかったことなど新しい事にも積極的にチャレンジし、後悔なく終える一年にしたいと思っています。去年一年を振り返ると、一年目のこの時期は右も左も分からず、何もかもが新鮮で経験する全てが特別!といった感覚でした。

昨年9月。初めて降り立ったハンガリーは、空気の澄んだ秋の気候で暑すぎず寒過ぎず、気候的にもとても過ごしやすかった記憶があります。まだ残暑も厳しく湿気の多いじめじめとした気候の日本を飛び出し移り住んだハンガリー。空気は軽く、天は明るく晴れ渡り、到着して初めて空気を吸った時、この地に歓迎されているかのような印象を受けて、清々しくなんだかとても嬉しい気分になり自分に合いそうだと感じました。

街に繰り出し初めて見るこの街の景色も、私の目にキラキラと反射しました。思い描いていた通りのヨーロッパの街並みだったからです。古きよきを重んじ、ヨーロッパの歴史が目に浮かんでくるようなそんな街並みに感動しました。中でも一番深く感動したのは、ドナウ川沿いに夜景を見に行った時でした。この世の現実のものか!とドナウの夜景が美しすぎて私は夢を見ているのか起きているのかわからない衝動にかられたほどでした。今でも、何度何回見てもドナウの夜景には感動します。辛いことがあった時、物思いにふけりた時、どんな時も私はこのドナウの夜景に励まされて一年を過ごしました。

そんな夢見心地で始まった一年目ですが、いざ始まった毎日は目まぐるしく嵐のよう一年が過ぎていきました。私は2人の先生に師事することとなったのですが、毎回レッスンの準備に追われ、夜にはオペラ

やコンサートに足を運んだりすることも多くあり、始めの半年は自分のペースや生活スタイルを作ることに苦労しました。オペラやコンサートはこちらでは学生という特権もありますが、質の高い音楽が日本では考えられない程安値で聴くことができるので本当に気軽に足を運べる環境であり、これも私にとって留学してよかったなあと思う事の一つです。また、ハンガリーは隣国、オーストリア・ウィーンもバスや電車で3時間程とアクセスしやすい場所に位置していますので、どうしても聞きたかったコンサートがウィーンであった時、少し足を延ばしてウィーンまでコンサートを聴きに行きました。こういう事が気軽に出来、実行出来るのはヨーロッパに住んでいるならではだと思えます。

また、私はこの留学が海外で暮らす事もある一人暮らしをする事もある初めての経験だったのですが一年間暮らしてみても強く感じた事が「人は一人では生きられない」ということでした。初めてだらけの新生活。楽しいことも沢山ありましたが、時には困ったことや辛いこともありました。そんな時、私は幸運にも心をゆるして話をし、助けあえる友人に出会えました。時には共に音楽を作り、時には他愛もない話に花を咲かせ、互いに刺激し合い、分かち合い、そんなかけがえのない友人達と過ごした時間も私がこの留学で得た財産の一つだと思います。皆、音楽に真摯に向き合い日々精進しようとしている姿は私の活力にもなり本当に良い刺激を貰っています。

今年もそんな恵まれた環境で勉強出来る事に感謝し、日々頑張っていきたいと思っています。



留学生

医師を目指して
ペーチ大学医学部
坂本 たけし

僕は子供の時から海外の難民キャンプで働く医者の方に憧れていて、大人になったらそうありたいと思っていました。でも中学、高校と進み、厳しい大学受験のなかそんなことは忘れていました。そんなとき、ハンガリーで医学を英語で学べることを知りました。学費もアメリカやイギリスといった英語圏の大学よりも格段に安く、卒業後EUでの医師免許がもらえることが魅力的でした。「自分のしたかったことはこれだ！」そう思い、去年の6月にハンガリーにやって来ました。

でも実際は、海外に行ったこともなかったし、なによりも英語が不安でした。外人はともかく、同じような思いできている日本人は高校が海外だったとか、子供の時に海外にいたとか、とにかく英語ができました。そんななか一年目はブダペストで大学に必要な知識を学びました。予想通りはじめは授業中の先生のいいまわしや専門的な単語、そしてハンガリー語など分からないことばかりで、このままじゃ大学どころじゃないと

はバラトン湖や隣国に出かけたりしました。そしてこのころにはあらためて素晴らしい場所で勉強しているんだなあと感じるようになりました。くさり橋やドナウ川をはさんで見える王宮の夜景、中世のヨーロッパを思わせる建物、どれをとってもここ来てよかったなあと思うさせてくれました。

一年間のカレッジでの勉強はあっという間に過ぎ、今年の夏ペーチ大学医学部に進学が決まりました。ペーチ大学はハンガリーでもっとも歴史の古い大学で、ここは大学町といった感じの田舎町です。もともと出身は山梨の田舎なのでブダペストよりも勉強しやすいかなあと思い決めました。引越先の家は優しく、お菓子をつくって来てくれます。まだ道が分からないことがおおいですが、そんなときは道端でおじちゃんやおばあちゃんがたとえ言葉が通じなくても助けてくれます。ハンガリーの人達は私達のような外国人に対してもいつも優しく接してくれます。

そしていよいよ大学生活が始まったのですが、はじめの一週目まったく教室が分かりませんでした。実はこの大学は英語の他にハンガリー語、ドイツ語で医学を学ぶ生

刺激ある体験を積んで
リスト音楽院ピアノ科
山田 翔

ハンガリーへ来て早3回目の夏を越えました。私は現在ハンガリー国立リスト音楽院に在籍しています。ハンガリーへ留学を



決めたきっかけは、現在こちらで師事しているジョルジ・ナードル先生が来日された時、日本で受けた先生のレッスンに感銘を受け、この先生のもとで是非学びたいという思いか

らでした。初めてハンガリーを訪れたのは、私が中学2年生の時。日本で師事していた先生と共にヨーロッパの各地を周りながらその地でオーケストラと競演させていただくという機会をいただきました。同時に各地でレッスンをさせていただける機会があり、それが先生との初めての出会いとなりました。当時、何気なく弾いて頂いた先生の演奏のほんの一瞬出された音で、世界観が変わったことを今でも鮮明思い出します。あんなに、こうしなさいではなく、自然に自分の表現したい音楽に気づかせてくれる先生のご指導は私にとって一生の財産になりました。

2008年の6月にこちらで入学試験を受け、その年の9月から留学しています。こちらに来てみて、生活、文化などあらゆる習慣が日本と大きく異なり、最初は戸惑うばかりでした。まず生活に必要な物がどこに売っているのか、その場所までの行き方など、今まで日本では当たり前のように出来ていたことに感謝を感じながらの毎日でした。さらに、時間観念がだいぶ違うことに驚かされました。例えば電車やバスはいつ来るか分からない、入国管理局では大行列に並ぶことが当たり前など驚きの連続で、時間に対する日本の正確さを懐かしく思う日

落ち込む日々でした。でもここまで来たからには逃げちゃだめだと思い、授業中分からないことはすぐに先生に聞くようにしたり、友達に相談したりして必死についていきました。そうしているうちに外人の友達も出来るようになり生活にも徐々に余裕ができて、コンサートやオペラに行ってみたり時に

徒がいるのです。毎日クラスメートと校内を必死で冒険しました。そんなこんなでスタートしましたが、ここまでこられたのは多くの人の支えがあってこそだと思います。それを心に刻みながら、今は6年間という長い階段をどんなにつらくとも楽しみながら一歩ずつ進んでいきたいと思っています。

「ドナウの四季」ホームコンサート



7月10日に2年目を迎えた在留邦人向けマガジン『ドナウの四季』のホームコンサートを兼ねたパーティーが行われました。会場となったのは、このマガジンの編集長でもある盛田さんの事務所。事務所といってもブダペストの丘に面していて、ベランダから見ると絶景はブダペストのパノラマ絶景。白で統一されている会場にもなった広いリビングは、まるでキャンパスに描かれた絵のように絶景を引き立たせるものでした。そんな絶景を背景に、素晴らしいコンサートプログラム、そしてゲストの皆さんで持ち寄った美味しいお料理で目・耳・舌で大いに、そして贅沢に楽しませて頂きました。

コンサートは2部構成になっていて前半はリスト音楽院留学生やハンガリー在住の音楽家達が、日ごろから耳にした事のあるような曲を披露してくれました。ソロピアノ、4手ピアノ連弾、オーボエ、ヴァイオリン、フルート2重奏とヴァリエーションに飛んでいて華やかでした。後半は、ハンガリー国立オーケストラのメンバーであるヴァイオリン奏者とチェロ奏者、そして歌の2人が加わって更に本格的なレベルの高い演奏が聴けました。演奏者のそれぞれが楽しんで演奏されているので、聴いているこちらでもリラックスして奏でられる素敵な音へ引き込まれていきました。最後はみんなで「夏の思い出」を全員合唱しました。ハンガリー人ゲストも一緒に歌えますよう、日本語の歌詞をハンガリー語のアルファベットで読めるようにプログラムに載せてあったので、ハンガリー人もそのハンガリー語表記を見ながら歌ってくれていて、それを聴いた時は「ここにもハンガリー人と通じ合えるものがあるなあ」と嬉しくなりました。

コンサートの後は演奏家も、いらっしゃってくださったゲストの皆さん、そして関係者全員で持ち寄った美味しいお食事をいただきました。並べられていたのは日本の

お料理もハンガリー料理もあり、嬉しいことにデザートにケーキやクッキーなども揃ってあって、日頃このような豪華なご飯にありつける事はありませんので、たくさん頂くことができましたし、帰りにはお土産にとお持ち帰りまで頂いて帰りました。普段お会いしない方々ともお話もできて、本当に貴重な一瞬を過ごすことができました。

今回コンサート出演者を留学生や演奏家の方に声をかけさせていただいたので、なかなか人前で演奏する機会が持てないので、こういった場面で機会を頂けるのは演奏家にとってやりがいもあるし光栄な事です。次回のコンサートにブダペスト在住の皆さんのご来場をお待ちしています。良いコンサートになりますよう幅広く演奏家の方々に声をかけさせていただきます(桑名一恵)。

ホームコンサート出演者から一言

町田 百合絵さん(ピアノ)

ブダペストを一望出来る素敵な大豪邸でのコンサート、音楽家なら誰もが羨むことだと思います。ホームコンサートならではのお客様との一体感を感じ緊張しつつも、とても楽しく演奏させて頂き、他の様々なアンサンブルを聴けた事も良い勉強になりました。そしてお楽しみ!演奏会後の豪華なお食事会。美しい夜景を楽しみながら、皆さんが持ち寄った美味しい和食、ハンガリー料理、デザート、お酒をいただき、至福のときを過ごさせて頂きました。その際に、お客さんと沢山お話出来た事も貴重な機会でした。ハンガリーでの本当に素敵な思い出をどうも有難うございました。

岩瀬 桐子さん(フルート)

私は初めて盛田さんの事務所にお伺いしましたが、バルコニーからのとても素晴

ホームコンサート・プログラム Músor

第1部 Első része

1. モーツァルト: アンダンテ Mozart: Andante
ドビュッシー: 亜麻色の髪の乙女 Debussy: A lenhaju lany
田代 奏子(オーボエ) 森 京子(ピアノ)
Tashiro Souko(oboa), Mori kyoko (zongora)
2. サンサーンス: 『動物の謝肉祭』より化石、水族館、終曲
SAINT-SAENS: Az allatok farsangja: Asatagok, Akvarium, Finale
中村 美貴、松永 みなみ(ピアノ)
Nakamura Miki, Matsunaga Minami (zongora)
3. ピアソラ; リベルタンゴ Piazzolla; Libertango
成田 為三; 浜辺の歌 Narita Tamezou; hamabe no Uta(japan nepdal)
門野 由奈(ヴァイオリン)、香川 真澄(ピアノ)
Kadono Yuna (hegedű), Kagawa Masumi(zongora)
4. ラフマニノフ; プレリュードト短調 Rachmaninov: a-moll Préludes
町田 百合絵(ピアノ) Machida Yurie (zongora)
5. デュッペラー: アンダンテとロンド Doppler: Andante and Rondo
岩瀬 塔子、珠玖 加奈子(フルート)、森 京子 (ピアノ)
Iwase Tohko, Shuku Kanako (fuvola), Mori Kyoko (zongora)
6. バルトーク: 44のヴァイオリン2重奏 Bartók: 44 hegedű-duó
ジュジャ、井上 奈央子(ヴァイオリン)
Molnár Zsuzsa, Inoue Naoko (hegedű)
7. Mozart: Rondo
ジュジャ、井上 奈央子(ヴァイオリン) ジョルト(チェロ)
Molnár Zsuzsa, Inoue Naoko (hegedű), Bartha Zsolt (gordonka)

第2部 Második része

1. シュトラウス: ワルツ Srrauss: Keringo,
2. コシ・ファン・トゥッテよりアリア Codi fan tutte bói Ária
3. ドン・ジョバンニよりデュエット Don Giovanni bói Duettino
4. 小椋 佳: 思いこみ・シクラメンの香り Ogura kei: Omoi Komi, Ciklamen
演奏者・közreműködők:
坂井 圭子(ソプラノ)、盛田 常夫(バリトン)
Sakai Keiko (szoprano), Morita Tsuneo (Bariton)
ジュジャ(ヴァイオリン)、ジョルト(チェロ)、ヘディ(ピアノ)
Zsuzsa(hegedű), Zsolt (gordonka), Hédi(zongora)

らしい眺めに感激しました。コンサートがあったお部屋も、一段高くなったステージと客席とにうまく分けることができ、サロンコンサートにはもってこいのところで、ここが事務所だなんて・・と驚きました。

私が演奏させていただいたコンサートは、いろいろな楽器の演奏者が参加し、そして、演奏された曲もヴァリエーション豊かで楽しんで聞けるものでした。また、お客様がとてもあたたかく聞いてくださったので、アットホームな雰囲気のある素敵なコンサートになったと思います。また機会がありましたら、ぜひ参加させていただけたら嬉しいです。

松永みなみさん(ピアノ)

先日は大変お世話になりました。ありがとうございました。なんといいてもやはり、あそこからのブダペストの眺めが忘れられません。あんなに素敵な場所で演奏させていただけたこと、そしてリハーサルの時にいただいたお弁当をはじめ、当日もとてもおおいし



編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

いお食事をあの場所でいただけたこと、本当に嬉しく思っています。聴いて下さった皆さんも、とてもあたたかい方たちばかりで弾いていてとても楽しかったです。ありがとうございました。

珠玖 加奈子さん(フルート)

今回、演奏させて頂いたこと大変感謝しています。私たち音楽家は、日々自己向上のため努力し続けていますが、本来の目的である、人前で演奏する機会は、その練習量に比べ、大変少ないものです。時間に見てみると、年間、何百時間、いや、何千時間の練習に対して、ステージでの演奏ははたして、どのくらいあるのか???そして、その1回の短い本番の中で、それまで準備したことを花咲かせなくてはなりません。たまには絶望の淵に立たされることもあります。コンサートは体験や、練習をする場ではありませんが、しかし、練習を積んでも積んでも、ステージでしか得ることのできない体験が、どんなに大きいことか。今回のような、機会は私共にとって大変ありがたく、これで又一つ大きく成長することができました。今回、岩瀬桐子さん、森京子さんと共演させて頂き、本当に



嬉しかったです。音楽の喜びを分かち合え、大変幸せでした。人生の貴重な時間、私共の音楽を聞いて頂いた方々に心から感謝しています。温かい拍手を頂く時、これからも頑張っていこう!と元気づけられます。会場の事務所、素晴らしかったです。眺めも最高、そして、皆さんの作ってこられた手作りのお料理、本当に美味しかったです。演奏後のパーティーは、格別です。ちなみに、我が家は、私の練習の間、主人が一生懸命作って参上しました!すべてにおいて、

大変、楽しい会でした。ありがとうございました。

香川真澄さん(ピアノ)

7月の晴れ渡る青空の中、素敵なホームコンサートに出演させて頂きました。ため息の出るような素敵な会場とブダペストの美しい景色を目にしながら演奏出来たことは「幸せ」の一言です。今回はヴァイオリンとピアノで日本歌曲「浜辺の歌」とアルゼンチンの熱いリズムを感じる「リベルタンゴ」に挑戦しました。想像以上に、浜辺の歌の持つ穏やかな美しさや、情熱的なタンゴの世界を表現することに苦戦しましたが、試行錯誤する中で改めて曲の良さを知ることが出来たのも非常に良い経験でしたし、これからも沢山の曲に出会い、少しでも多くの方々に楽しんで頂けるような演奏を目指したいと思います。今回、このような機会を頂いたことに心から感謝しております。



坂井圭子さん(ソプラノ)

以前歌ったモーツァルトのオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」よりフィオルデリーゼのアリア「岩のように動かず」を選曲した。毎日仕事をしているため、なかなか練習時間がとれない。昔の記憶をたどりながら、硬くなっている身体と喉のウォーミングアップにだけは努めた。会場でのリハは2回。ピアノだけでなく、ヴァイオリンとチェロが伴奏してくれたので、音響やバランスに気をつけながら集中してやることに努めた。

当日は、心地よい夏の一夜となった。立山研究所は、玄関を入ると天井まである窓の向こうに、まさにハンガリーの方々が望んでやまないパノラマが広がる。その景色たるもの、「圧巻!」としばし立ちすくんでしまうほどである。しかし、コンサートのお客さんを前に歌うと、その素晴らしい夜景は私の後ろに広がった。短い時間で仕上げなくてはならなかった本番ではあったが、弦楽器の音色に酔いながらアリアを歌いきることができた。

次は、ぜひツィタデラの頂に立つ女神像に向かって歌ってみたいと思った。



Japan Coop Kft.:
1025 Bp, Cimbalmó u. 7.
Tel.: 345-0450 Fax: 345-0008
e-mail: paprika-tsushin@jpc.hu
ホームページ: www.paprika-tsushin.hu/
登録は無料ですのでE-Mailにてお申し込みください。

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

日記・エッセイ



自分のページを持てる。
日記、エッセイ、ブログ、
記録として。

コミュニティ



同じ興味・関心を持つ
仲間の交流の場。
OB/OG会にも。

豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、
そこから生まれる新しい
発見や気づきが、
人生を豊かに輝きあるものに。

安心・安全



無料会員制。
SNSのメンバーだけが利用
できるクローズドなサービス
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用としていらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かす優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

さくら

DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu

Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.

Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ
ローバルな企画・マネジメント展開を行って
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6

Tel&Fax: +36-1-786-7846

Mobil: +36-70-3815548

e-mail: propart@chello.hu

web: <http://propart.client.jp/>

Propart